スウィフトの生涯（V）

物語詩「バウキスとピレモン」執筆からチャールズ・ジャーヴァスによるスウィフトの肖像画制作まで（1706－1710）

三　浦　　謙

1706年，スウィフトは物語詩「バウキスとピレモン」[1] を書いている。善良な百姓の老夫婦バウキスとピレモンが，乞食の托鉢僧に変装して民情視察の行脚を重ねていた2人の聖(ひじり)を手厚くもてなす。その後，老夫婦は褒賞として牧師夫妻への変身を許され，死後はイチイの樹になるという話である。オウィディウス[2]の第8巻を手本にしたこの物語詩は最もよく人に知られたスウィフトの作品の一つとされている。

ただ，この詩は，後日アディソン[3]によってかなり手を加えられた。初出では230行あった。それが96行省かれて44行付け加えられ，22行変更させられて178行になった。エルリントン・ボール[4]が初出の形と修正後の形をその『スウィフト詩集』[5] にそのまま転載している。それによると，たとえば，初出の最初の46行は次のように14行に短縮されている。

(original)	(revised)
In ancient times, as story tells,	In ancient times, as story tells,
The saints would often leave their cells,	The saints would often leave their cells,
And stroll about, but hide their quality,	And stroll about, but hide their quality,
To try good people's hospitality.	To try good people's hospitality.

It happen'd on a winter's night,
As authors of the legend write,
Two brother hermits, saints by trade,
Taking their tour in masquerade,
Came to a village hard by Rixham,
Ragged and not a groat betwixt 'em.
It rain'd as hard as it could pour,
Yet they were forc'd to walk an hour
Fom house to house, wet to the skin,
Before one soul would let 'em in.
They call'd at every door: "Good people,
My comrade's blind, and I'm a creeple!
Here we lie starving in the street,
'Twould grieve a body's heart to see't,
No Christian would turn out a beast,
In such a dreadful night at least;
Give us but straw and let us lie
In yonder barn to keep us dry."
Thus in the strollers' usual cant
They begg'd relief, which none would grant;
No creature valued what they said,

It happen'd on a winter night,
As authors of the legend write,
Two brother hermits, saints by trade,
Taking their tour in masquerade,
Disguis'd in tatter'd habits, went
To a small village down in Kent;
Where, in the strollers' canting strain,
They begg'd from door to door in vain,
Tried every tone might pity win,
But not a soul would let them in.

One family was gone to bed:
The master bawled out half asleep,
"You fellows what a noise you keep!
So many beggars pass this way,
We can't be quiet night or day;
We cannot serve you every one;
Pray take your answer and begone,"
One swore he'd send 'em to the stocks;
A third could not forbear his mocks,
But bawl'd as loud as he could roar,
"You're on the wrong side of the door!"
One surly clown look't out and said,
"I'll fling the ****-*** on your head:
You shan't come here, nor get a sous!
You look like rogues would rob a house,
Can't you go work, or serve the king?
You blind and lame! 'Tis no such thing.
That's but a counterfeit sore leg!
For shame! Two sturdy rascals beg!
If I come down, I'll spoil your

trick,
And cure you both with a good stick."

（初　出）

話によると，その昔
聖（ひじり）は，しばしば，その棲家を出て
さまよい歩き，身分を穏して
民情を視察したものだった。
物語作者の記すところによると
ある冬の晩のことだった。
聖を生業とする２人の兄弟の穏遁僧が
変装して行脚の途次
リクサムに近いある村にやってきた。
ボロをまとい，１文の持合せせもなかった。
大雨だったが，
入れてもらえる家がみつかるまで，
ズブ濡れになりながら，
１軒１軒戸をたたき，
１時間も歩き廻らなければならなかった。
彼らは訪ねる家ごとに，こういった。「みなさん
私の連れは盲目で，私はビッコです。
こんな有様をみたら，だれしも心を傷めるでしょう。
すくなくとも，こんな恐ろしい晩に，
キリスト教徒なら獣にはなれない

（修正後）

（８行目までは全く同じ）
ボロボロの服をまとって
ケント州のある村にやってきた。
そこでお題目を唱えながら
１軒１軒物乞いしたが，駄目だった。
憐みをかうような調子をのこらず試してみたが，
だれひとり，２人を中に入れようとはしなかった。

でしょう。
藁しべだけでも私たちに恵んでください。そして
あの向うの納屋で，私たちを横にさせてください。躰を乾かせたいのです。」
こうして，いつものお題目を唱えながら
物乞いをして廻ったが，だれも応ずるものはなかった。
だれも彼らのいうことを尊重しなかった。
ある家は寝てしまった。
主人は寝ぼけ顔で，こう怒鳴った。
「おまえらは，いつまでも，なんてうるさいんだ！
乞食が，たくさん，ここを通るんだ。
昼も夜もうるさいったらない。
おまえらに，いちいち施し物はできない。
どうか，たのむから消えうせてくれ」
ある者は晒し者にするぞと罵り，
また，ある者は，おまえらのインチキには我慢できないといって，
大声で，こうわめいた。
「おまえらは見当違いの家にきているんだ！」
無愛想な田舎者が顔を出していった。
「おまえらの頭にレンガの破片（かけら）投げつけるぞ。
ここへはくるな。鰓（びた）一文やらん！

おまえらは盗みに入る泥棒みたいだ。
働けないのか，王様のお役に立てないのか?
盲目でビッコか！だが，そうじゃあないだろう！
ビッコのふりをしているだけだ！
恥をしれ！　2人とも頑丈な躰で物乞いしているゴロツキなんだ。
なんなら，おれがおまえのインチキを形なしにした上，
棍棒でしこたま　こらしめてやろう」

8行目までは初出と修正後の形は変るところがない。9行目になって「リクサムの近くの村」が「ケントの小村」になり，10行目以下の描写がかなり省かれて，聖(ひじり)が物乞いする文句や聖(ひじり)がうける執拗な悪罵は一切除かれている。確かに簡略にはなっているが，反面，物語詩としての面白味は薄らいでいるように思える。

だが，アディソンの文筆の才を高く評価していたスウィフトは，ジョン・フォスターの誌すところによると，アディソンの修正をそのまま認めて，初出の形に戻そうとはしなかったという。

アディソンの文芸上の力量が尋常ではないというスウィフトの評価は，1712年の「国語改良の一提言」(6) にもみられる。ここで，スペイン語やフランス語やイタリー語よりも洗練されていない英語を改良論者が却って乱していると嘆きながら，スウィフトはアディソンがタトラー紙およびスペクテーター紙(7)への寄稿を通じて，正しい国語の普及に努めた功績は大きいといっている。

スウィフトがアディソンと知り合ったのは1707年11月から1709年6月までのイングランド滞在中の初めの時期だった。2人の間で交された最初の書簡は1707／8年2月29日付の手紙で，アディソンがスウィフトを

ディナーに招待している。その後，2人は頻繁に会食を重ねて親しみを増していった。会食の席での二人の会話は決して途切れることなく，第三者の介入を全く必要としなかったとスウィフト自身いっている。

ところで，1年半におよぶこの長いイングランド滞在の時期に，スウィフトは2シーズンにわたって，ロンドンの人士を娯しませている。パートリッジ騒動である。

天文学の興隆により，17世紀以降占星術は衰退したが，星辰の運行に合わせて天候や病気や放血を朴する占星師のことばは，いぜん，中流や下層級に大きな影響があった。チャールズ二世からアン女王の治世にかけて本職は靴屋のジョン・パートリッジ[8]なる男が，いかがわしい星占いの所説を流布させたり，暦を発刊したり，医者の真似事までして人心を惑わせていた。

これに腹を据えかねたスウィフト[9]は1708年1月に「1708年の予言」[10]なる冊子を出してパートリッジを揶揄した。執筆者はアイザック・ビッカースタッフ[11]である。アイザック・ビッカースタッフというのは，鍛冶屋の看板からヒントをえてスウィフトがつけた架空の人物名である。まず，タイトル・ページで，このパンフレットは「イギリス国民が俗悪な暦屋にこれ以上欺されないようにするために書いた」のだと執筆目的を明らかにしているが，なんといっても秀逸なのは最初の予言である。こんなふうにいっている。「私の最初の予言は，とるに足らぬこととは思うが，厚顔にも星占いを業とする愚か者たちが自身の関心事にいかに無知であるかを示すために，一応触れておきたいと思う。それは暦を作っているジョン・パートリッジについての予言である。私流に彼の運勢を占ってみたら，きたる3月29日，夜11時頃，激しい熱病で，まちがいなく彼が死ぬという卦が出た。したがって，この点を考慮して手遅れにならないうちに，身辺の整理をしておくよう彼に申し上げておきたい」[12]

スウィフトは，ある顕官への書簡という形で，これに追い打ちをかけて，「第一予言その後の成行き」[13]というパンフレットを出した。ここで，スウィフトは次のようなことを喧伝した。「死ぬ10日ほど前に，パートリッ

ジに会った。その時には，友人連中は気づかなかったようだが，かなり憔悴していた。2，3日前に病状が悪化したので，寝室に閉じこもり床から離れられなくなった。昨日4時頃，危篤の報せをうけた。そこで憐憫と好奇心から見舞いに行った…30分話し合って病室を出る時，私はもう長くはないと思った。案の定，それから2時間も経たないうちにパートリッジは息をひきとった。夜の7時5分過ぎだった。ビッカースタッフの予言は4時間狂っていただけである」

これを読んだパートリッジは激怒した。彼は自作の1709年の暦の中で，ビッカースタッフという男はイカサマの破廉恥漢だ。パートリッジはこの通り元気だと抗弁した。これに応えて，スウィフトはただちに「ビッカースタッフ氏の弁明」[14] を書いて，パートリッジの死が間違いないことを更めて公言した。以降，パートリッジからはなんの音沙汰もなくなった。

1708年から約1ケ年におよんだこのパートリッジ騒動は当時のロンドン子をたいへん興がらせた。だれが書いたかわからないこの方面の戯作が今日かなり残っていることもその証拠になろう。

伝記作者の多くは，この一件をスウィフトの卓抜なユーモアとして賞めそやしているが，伝記作者の一人で，チャールズ・ラムのユーモアを好んだレズリー・スティーヴンは度の過ぎたプラクティカル・ジョークとしてこの話には背を向けている。

プラクティカル・ジョークといえば，こんな話もある。1709年の万愚節の前日，スウィフトは3シリング出して，ポスト・ボーイ[15]という新聞に，ストランド街のドイリーという美術商の店で，稀覯本，版画その他よりぬきの古美術品のせりうりがあるという広告を掲載させた。これは万愚節をあてこんだウソで，4月1日のポスト・ボーイ紙にこのような競売はなかったという申し開きの記事が出たが，スウィフトは，あるいは広告掲載の翌日，ストランド街に出向き，古美術趣味の客がドイリーの店先に行列をつくっているのを見て，ニヤニヤ笑っていたかもしれない。スウィフトには，こういう粘っこいイタズラを好む一面があった。

さて，1707年11月29日から1709年6月29日までの正味1年半を超え

る長期のイングランド滞在中に，教会人としてスウィフトが手がけなければならない大きな仕事があった。それは，イングランドの国教会にすでに認められていた初穂税[16]の免除をアイルランドの国教会にも認めさせることだった。ところが，アイルランドでのテスト・アクトを撤廃させるという条件を呑まなければ，この実現は不可能だった。時のゴドルフィン内閣はテスト・アクト撤廃を擁護してホイッグと非国教徒の支持を得ていた。王政復古後のほとんどすべてのアングロ・アイリッシュがそうであったように，スウィフト自身善良なホイッグであった。ムア・パークでの鍛練は徹底したホイッグ主義の政治原則を彼に信奉させることになった。だが，1708年早々，ゴドルフィン内閣の政策に追髄すれば，アイルランドの国教会が犠牲になることが明らかになった時，スウィフトは尻込みした。1708年4月，キング大司教への書簡で，テスト・アクト撤廃を容認させようとしたアイルランドのブロデリック下院議長の動きに言及して，スウイフト自身は，これに反対である旨の意志表示をしている。

スウィフトは，この時期穏健な教会人として自身の立場を明らかにする次のような論考を手がけている。

1．「一国教会人の宗教観および政治観」[17]　(1708年)
2．「イングランドでのキリスト教廃止反対論」[18]　(1708年)
3．「宗教の普及と風儀改善への一試案」[195]　(1709年)

「一国教会人の宗教観および政治観」で，スウィフトは，まず，自身は穏健な国教会人であって頑迷な宗教家ではない。それに，現実の政治にはなんら関与する者ではないが，必要とあらば，ホイッグ，トーリーいずれの関係者とも全く自由に談合する用意があるといっている。スウィフトは「国教会と国会を全き姿で維持してゆこうとすれば，前者のためには極端なホイッグを拒け，後者のためには極端なトーリーは避けるべきだ」[20]という考え方だった。スウィフトは，またカトリックの修道会に入るように，特定の党に所属することは市民的自由や宗教的自由を阻害することだとも述べている。したがって，この論考ではmoderation（穏健）という言葉が

キー・ワードになっているのだが，この用語の意味がどうも曖昧なのである。宗教上の儀礼や神学上の理論を異にするという理由から国家の要職への道が拒否されるのは不当であるとして非国教徒の官途任用を容認しようとするホイッグの立場は穏健といえようが，プレズビテリアン[21]，アナバプティスト[22]，インディペンデント[23]といった新教各派をなんら区別せずに，等しなみに敵視し，テスト・アクト反対の立場をあくまでも崩さない国教会員である自身の立場を穏健というのはどういうことか。スウィフトは政治的には穏健なホイッグであるが，こと国教会にかかわる問題となると，スウィフト自身否定する bigot（頑迷な宗教家）になる。だが，これは，当時まだ基盤が安定していなかったアイルランドの国教会を維持する上に必要な政策だったのかもしれない。

「キリスト教廃止反対論」はビッカースタッフ的な諧謔味を混じえた論稿である。スウィフトは，まずキリスト教廃止の利点をいくつか挙げる。その一はキリスト教廃止によってイギリスの防壁である良心の自由が確立し，しかも大幅に拡大されることである。良心の自由は聖職者の策謀によって現状では余りにも制約が大きい。現に前途有為な2人の青年が無神論を表明したために頑迷な法律にふれ涜神のかどで一生を棒にふった例を挙げている。その二は現在無駄になっている7日のうちの1日が活用できるようになることである。毎週日曜日，店舗を閉して教会に集まることは仕事および娯楽の障害になっているという。その三は高教会と低教会，ホイッグとトーリー，長老会派と国教会間の反目がなくなる。この対立は公務の進行に支障をきたしているだけに，この利点は前の二つの利点よりも大きいという。その四はキリスト教がなくなれば，美徳，名誉，良心，正義という名のもとに人間の心の平安を乱してきた教育の偏見もなくなる。

このように利点を挙げてくると，スウィフトはキリスト教廃止に賛同しているかに思えるが，もちろん，これはスウィフトの真意ではない。スウィフトが懸念しているのは，むしろ廃止提案後，国教会が置かれる憂慮すべき事態にある。スウィフトが最も恐れるのは，キリスト教廃止案が具体化することにより，自らが属する国教会が衰退して，非国教徒が勢威を

揮うか，もしくはカトリックが抬頭してくることなのである。

「宗教の普及と風儀改善への一試案」では，頽廃している社会や腐敗している宗教界の実状を細々と挙げ，その対策を講じている。スウィフトが憂慮すべき事態として最初に挙げているのは酒場の深夜営業である。酒場の営業を12時に限り，いかなる口実をもうけても，酒場への女の出入りを一切禁止すれば，喧嘩，盗難，売春は大幅に防げるだろうといっている。次は詐欺の横行である。弁護士も商人も職人も詐欺は日常茶飯事であり，善良な市民をだしぬいている。ブドー酒に毒を混入するブドー酒醸造業者とか，すでに抵当になっている物件の購入をすすめて客を窮地に追いこむ弁護士とか，決定済みにもかかわらず奸計で客の財産をすべて奪いとって処分する公証人とかは死罪に当るといっている。三番目は，出版が無規制なことである。このためキリスト教を標榜するいかなる宗派によっても不可侵とされてきた教義を冒涜する刊行物が公けにされて，三位一体，キリストの神性，霊魂の不滅，啓示の真実性などが毎日公然と踏みにじられている。それに，住宅や住民が激増している都会の多くで，教会建設への関心がほとんどないため，住民の六分の五は礼拝に出ることがない。とくに，ロンドンでは，牧師補が1人ないし2人についている1人の牧師が，時には2万人を上廻る住民を担当することになっている。文明化されたいかなる時代いかなる国とくらべても，これほど宗教がないがしろにされている例はないと嘆じている。

では，どうすればよいか。法的な規制もさることながら，肝心なのは聖職者が積極的に，俗人に受け入れられるようにすることだという。たとえば，現状では聖職者が屯するコーヒーハウスやクラブは定っていて，かれらが俗人の集まるコーヒーハウスやクラブに姿を見せることはまずない。たとえ，あるとしても，そのさいは沈黙しているか，疑わしい目で見るかのいずれかである。聖職者は俗人の中にとびこみ，信仰を説くまえに敬愛されるようにならなければならない。医者が処方する最良の薬でも，その医者が患者に嫌われていたら，患者はその薬を飲もうとはしないだろう。聖パウロはユダヤ人にたいしてはユダヤ人になりきり，ギリシャ人にたい

してはギリシャ人になりきるという風に，なんにでもなりきることができた。俗人に受け入れられるためには，このような「蛇の智恵」が必要であろうといっている。

スウィフトは以上の論稿を一冊に纏めて出す予定で，友人のスティールも序文を書くことに同意していたが，この時期には計画のみで発刊されなかった。

スウィフトとスティールとの文筆上の結びつきは1709年のタトラー紙発刊にもみられる。スウィフトはパートリッジ騒動でロンドン子を娯しませたアイザック・ビッカースタッフという筆名をタトラー紙上でスティールに使わせたり，その9号には「朝の場景」*A Description of the Morning* と題する詩を寄稿したりしている。

A Description of the Morning

Now hardly here and there a hackney coach
Appearing, showed the ruddy morn's approach.
Now Betty from her master's bed has flown,
And softly stole to discompose her own.
The slipshod prentice from his master's door
Had pared the dirt, and sprinkled round the floor.
Now Moll had whirled her mop with dexterous airs,
Prepared to scrub the entry and the stairs.
The youth with broomy stumps began to trace
The kennel-edge, where wheels had worn the place.
The smallcoal man was heard with cadence deep;
Till drowned in shriller notes of chimney-sweep.
Duns at his Lordship's gate began to meet;
And Brickdust Moll had screamed through half a street.
The turnkey now his flock returning sees,
Duly let out a-nights to steal for fees.
The watchful bailiffs take their silent stands;
And schoolboys lag with satchels in their hands.

朝の場景

貸馬車の姿があちこちに見られなくなると
朝が近づいて真赤な太陽が顔を出す。
するとベティは主人のベッドを飛び出して，
抜き足さし足で自分のベッドにおさまる。
踵のすり切れた靴をはいた丁稚は主人の家の玄関口のドロを削ぎ落し，床の水撒きをすませている。
そこでモールはモップをあざやかに使いこなすと，
玄関と階段の拭き掃除にとりかかる。
若者が車輪で磨り減らした溝をしらべる。
石炭売りの太い呼び声が
煙突掃除の甲高い声に消されてゆく。
借金とりの執達吏が取立てをたのまれた家に集まりだす。
レンガの粉で汚れたモールが悲鳴をあげて町中（まちなか）を途中まで駈けぬけてゆく。
ヤミ金を払って夜こっそり外に出た囚人が
もどってくるのを看守が見守っている。
用心深い借金とりが，だまって所定の場所に立っている。
するとカバンをさげた学童がノソノソとその場を通りぬけてゆく。

この詩は，いわゆる 'town eclogue' とか 'urban pastoral' といわれる部類の最も初期の詩で，スティールによると，この「朝の場景」はロンドンのウエスト・エンドを描いているという。

当時，スウィフトは，ロンドンでの宿泊には週5シリング半を当て，宿舎での夕食は通常8ペンスで済ませていた。そして，雨の時以外は節約のため馬車（2シリング）にも椅子駕籠（1シリング）にも乗らず町を歩いていた。スウィフトにとってのささやかな贅沢はコーヒー・ハウスでのむ4ペンスのコーヒーだった。だが，こうして，町を歩き，コーヒー・ハウスでの談笑を楽しんだからこそ，スウィフトは「朝の場景」で町のたたず

まいを活写することができたのである。

ここで，スウィフトの当時の交友に触れよう。スウィフトには親戚づきあいは殆どなかったが，パッティー・ロルト[24]という従妹を好んで，家を訪ねては金をあたえている。そして，スウイフト自身コーヒーをたてるのが好きだったが，彼女にも，うまいコーヒーをたててもらうため，3シリングのコーヒー・ロースターを彼女に買いあたえている。

また，スウィフトはしばしばエプソム[25]のバークレー家を訪れて，18世紀に流行したオンブル[26]というトランプ遊びに興じている。スウィフトのお相手をしたバークレー家の子女の中で，スウィフトのお気に入りは，2番目の息女であるベティー[27]だった。彼女は1706年オレンジ公ウイリアムの落し子といわれたジョン・ジャーメイン卿と結婚するが，1718年夫に先立たれ，50年以上寡婦として過した。スウィフトは彼女に好意をもち，晩年まで彼女との交友は続いた。

トランプ遊びでスウィフトのお相手をした女性の1人に，万有引力を発見した物理学者アイザック・ニュートン卿の姪のキャサリン・バートン[28]がいる。彼女はニュートンの友人であるハリファックス卿との情事をしきりに噂されていた。事実だったようで，ハリファックスが1715年に死ぬと，巨額の遺産がキャサリンの手に渡った。

ところで，おじの家の家政をとりしきっていたキャサリンはニュートンの食生活の一端を伝えている。それによると，彼は客を招いてのディナーには約2時間をかけたが，夕食は暖かなグリュエル（うすい糊・オートミールの一種）かミルクに卵ですませ，朝食は，しばしば冷えた食事で間に合わせたという。セント・マーチン街[2]のニュートン家はスウィフトが当時住んでいたレスター・フィールズ[30]の居宅の南側に当ったので，スウィフトはよくキャサリンを訪ねた。スウィフトより12歳年下で，しとやかな上に，話好きのキャサリンは彼の好みの女性だった。

それに，当時スウイフトにできた交友でとくにここで挙げておきたいのはチャールズ・フオード[31]である。フオードはララカーとダブリンの中間にあるウッドパーク[32]の土地の管理を父親から引き継ぎ，当時，年約700

ポンドの収入があった。フオードはイートンを出てダブリンのトリニティ・カレッジで教育をうけていた。父親はアイルランドの出だが母親はイングランドの生まれだった。イングランドとアイルランドの両国にかかわるフオードの履歴はスウィフトに自分自身のことを想わせた。フォードはスウィフトより18歳年下だった。1708年頃から2人は親密になり，その交友は，以後約30年続くことになるが，スウィフトはフオードに息子にたいする父親のような情愛を感じていた。スウィフトは仕事に疲れると，フオードを散歩に連れ出した。気の置けない話相手として申分なかった。

スウィフトが当時親しくしていた要路の人物に，バークレーの外，ペンブローク伯[33]とアンドリュー・フアウンテイン卿がいる[34]。ペンブロークはウイリアムの治世中，数々の要職を歴任し，1707年にはオーモンド侯の後を継いで，アイルランド総督になっていた。スウィフトはペンブロークと親しくペンブロークはスウィフトをしばしば自邸に招いた。フアウンテインはノーフォークの由緒ある家柄の出で，1699年ナイトに叙せられ，古書，古銭，絵画の蒐集で知られていた。フアウンテインがペンブロークとの面識をえたのも，このコレクションを通じてであった。三人は寄り合うと，地口や戯詩を交換しては興じ合った。当時，スウィフトが書いた原稿で今日残っているものの多くはファンティンのコレクションから出ている。

この外，アディソンのサークルに属していた者にロバート・ハンター[35]がいる。彼は学者肌の准将で，植民地ヴァージニア（アメリカ）の総督代理として赴任する前にスウィフトと知り合った。ハンターは任地ヴァージニアへ赴く航海の途中，フランスの私掠（しりゃく）船に捕まり入牢の憂目にあった。獄中のハンターに宛た1708／9年3月22日付のスウィフトの手紙をみると，実現はしなかったが，イギリス本国で昇進の覚束ないスウィフトが植民地ヴァージニアの司教職までも考えていたことがわかる。

ところで，1709年5月「朝の場景」執筆後，ロンドンを去って，1年4ケ月余りをアイルランドで過したスウィフトは1710年9月再びロンドンにやってくる。この時期に前回のロンドン訪問のさい宮廷画家チャール

ズ・ジャーヴァス[36]が描き始めたスウィフトの肖像画が完成している。スウィフトはジャーヴァスに描いてもらえる日は朝7時に起きてジャーヴァスのアトリエに出向き，4時間モデルになった。この肖像画では，スウィフトの額は広く，青い眼には目蓋が重くかぶさり，眉毛は濃くて太い。鼻はいくらかワシ鼻で，唇は少し突きだし，顎は二重で，えくぼができている。この画をみたポープ[37]は友人のスペンサーに書簡でたいへんよく似ていると語っている。スウィフトの初期の最も権威あるとされているこの肖像画は1739年春，オックスフォード大学の副学長およびボーリンブルック[38]それにホープの賛同をえて，オックスフォード大学に寄贈されたので，今日，同大学のボドレアン図書館[39]に収蔵されている。

おもしろいことに，ジャーヴァスのほか，自身，画才があると信じてジャーヴァスに画の手ほどきを受けていたポープも，スウィフトの肖像画を描いている。いや，描いたことは描いたのだが，残念なことに，1年間努力して画才のないことを思い知らされたポープが自身で捨てさってしまったのだ。1713年8月31日カリル宛の書簡で，ポープは「聖ルカが画を描いた時には，天使がやってきて画業を完成させましたが，私が描く時には悪魔が最後の一筆を入れます。私はスィフトの画を3枚，モンターギュー夫人の画を2枚，聖母マリアの画を1枚破り棄てました。」といっている。テムプル・スコットはこの処分をまことに惜しみ，「どんな欠点があろうと，今日残存していれば，その1枚は，師匠ジャーヴァスの画12枚よりも高値をよんだことだろう」と歎いている。

注

(1) *The Story of Baucis and Philemon.*

(2) Ovid (43B.C. — ?A.D.17).

ローマの詩人。『恋愛技法』*Ars Amatoria*,『変身物語』*Metamorphoses* などの著作がある。Augustus 帝によってローマから追放され配所で死んだ。

(3) Joseph Addison (1672 — 1719).

政治家，著作家。アイルランド総督 Wharton および Sunderland の秘書官を勤める。1709年 Steele と週3回刊行のタトラー紙 *the Tatler* を発刊する。スウィフトは1708年頃から，アディソンやスティールと頻繁に交友を重ねてい

た。1708年7月10日のAmbrose Philips宛の書簡で，スウィフトは次のようにいっている。「アディソンとスティールと私の3人組は太陽と月と地球のように，揃って会うことは滅多にないが，2人のうちどちらかとは，私はしょっちゅう会っている。アディソンとスティールの2人もよくあっているようだ」

アディソンは，外向的で陽気なスティールとは逆に内省的な性格だったが，スウィフトとの談話をとくに好んだ。

(4) Francis Elrington Ball (1863—1928)

アイルランド生まれのスウィフトの研究家。

The Correspondence of Jonathan Swift (1910—14).

(5) *Swift's Verse* (Octagon Books, 1970), pp. 68—9.

(6) *A Proposal for Correcting, Improving, and Ascertaining the English Tongue* (1712).

(7) The Spectator. 1711年3月スティールとアディソンが共同で発行した日刊紙。1712年12月に一時廃刊になるが1714年アディソンが再刊する。

(8) John Partridge (1644—1715)。別名 John Hewson.

(9) スウィフト以前にもパートリッジを攻撃する者はかなりみられた。その中で，ひときわ目立つのはTom Brownである。彼は『確実に起ることについて確実な占いをするパートリッジの予言』(*The Infallible Astrologer, or Mr. Silvester Partridge's Prophesie and Prediction of what shall infallibly happen* を少くとも18回連載して，パートリッジを嘲笑した。

(10) *Predictions For The Year 1708.*

(11) Isaac Bickerstaff.

(12) *The Prose Writings of Jonathan Swift*, Vol. II, p. 145.

(13) *The Accomplishment of the First of Mr. Bickerstaff's Predictions* (1708).

(14) *A Vindication of Isaac Bickerstaff, Esq.* (1709).

(15) *The Post Boy*

(16) first-fruits.

新任の聖職者が教皇（のちに国王）に上納した初年度収益。

(17) *The Sentiments of a Church-of-England Man with Respect to Religion and Government.*

(18) *An Argument against Abolishing Christianity in England.*

(19) *A Project for the Advancement of Religion and the Reformation of Manners.*

(20) *The Prose Writings of Jonathan Swift,* Vol. II, p. 25

(21) Presbyterians. 長老会派。司教制度をとらず，聖職者同権を主唱する新教の一派。

(22) Anabaptists. 再洗礼派。成人後の再洗礼と政教分離を主張する新教の一派。

(23) Independents. 独立教会派。独立自治の原則に基づいて，すべての立法およ

び司法の機能は，個々の教会もしくは地域の信徒会衆に付与されていると考える新教の一派。Congregationalists ともいう。

(24) Patty Rolt. 生歿年未詳。

(25) Epsom. ロンドンの南方 24 kmにある Surrey 州の都市。その南西郊外 Epsom Downs で Derby 競馬が行われる。

(26) ombre. スペイン起源の 3 人でするトランプ。18 世紀のイギリスで流行った。

(27) Lady Elizabeth Germain (d. 1769).

(28) Catherine Burton 生歿年未詳。

(29) St. Martin's Street.

(30) Leicester

(31) Charles Ford. (1682 — 1741)。後年，『ガリバー旅行記』出版のさい，大きな役割を演ずる。

(32) Woodpark.

(33) Thomas Herbert, 8th Earl of Pembroke (c. 1656 — 1733).

(34) Sir Andrew Fountaine (1676 — 1753).

(35) Robert Hunter (d. 1734).

(36) Charles Jervas (C. 1675 — 1793). 肖像画家だが，Don Quixote の翻訳を手がけた文人でもある。

(37) Alexander Pope (1688 — 1744).

(38) Henry St. John Bolingbroke, Ist Viscount (1678 — 1751).

(39) Bodleian Library, Oxford.

主要参考文献

Harold Williams, ed., *The Poems of Jonathan Swift* (Oxford, 1966).

Harold Williams ed., *The Correspondence of Jonathan Swift* (Oxford, 1972).

Irvin Ehrenpreis, *Swift* (Methuen, 1983).

John Forster, *The Life of Jonathan Swift* (Folcroft, 1972).

Henry Craik, *The Life of Jonathan Swift* (Burt Franklin, 1969).

Herbert Davis, ed., *The Prose Writings of Jonathan Swift* (Oxford, 1969).

Elrington Ball, ed., *Swift's Verse* (Octagon Books, 1970).